



定置網漁に生きる —能登の海—

中田 作助

聞き手・東山瑠花 宮藤莉奈 山下明星 (石川県立能登高等学校2年)

自己紹介

昭和7年4月2日生まれ(83歳)、昭和26年に地元の宇出津水産高校を卒業してからずっと漁師。子供の頃から海



中田さん個人の番屋にて

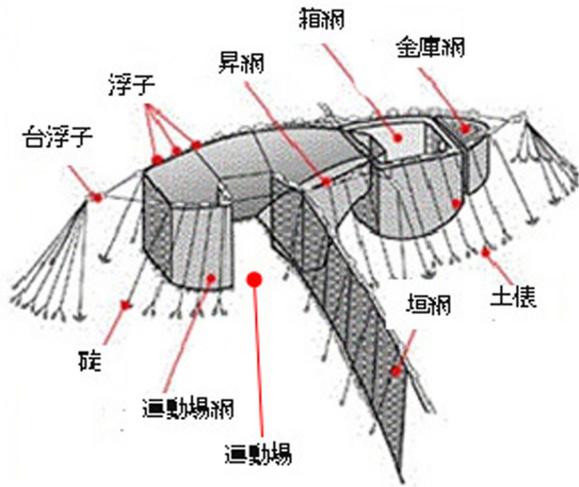
が好きやった。自分らの時、はじめは高校に50人おったが、漁師の方がいいと30人くらいになった。学校の向かいに造船所があって、仲間が「おら、明日からおらんぞ！北海道、イカ釣りの船に乗る」と言って行ってしまった。

定置網の漁師になろうと思ったきっかけは先代から、昔からやととるからね。

今普通に個人でやっているのが中型。株式みたいにしてやととるのが、鵜川の日の出大敷やね。

定置網とは

定置網は、土俵や碇で固定したものを定置網という。そうして魚を捕る。網を敷設しておいて、朝起こしに行く。一番大事な魚が入っているところ「おとし」(金庫ともいう)は、昔は1か月半か2か月目位毎に網の入れ替えをしていた。でも、最近は環境にやさしい藻のつかない薬、防藻剤が出てきたから、7、8か月は持つわけや。山と一緒に春にな



定置網 (weblio 辞書 水産大百科より)

れば芽を出し、冬になれば腐る。8月、9月に新しい海藻が出てきて、春先5月には藻も一緒に腐る。今入れてある網は、1年に1回入れ替えすれば大丈夫や。垣網とか種類はいっぱいあるけど、魚の入りやすいように魚の入るところは、防藻剤を使って藻がつかないようにしとる。農家やったら、田んぼの草取りと一緒にや。

定置網の大きさ

俺のは、でかいので網の幅が400間(約600m)、垣網が5km位やな。昔から、測り方は、両手広げて「一尋」(約1.5m) そんな測り方でやるから道具はいらんのよ。だから、設計図面書いてやると合わんことがある。少々合わんでもなんとでもなかつた。今ではそんなことはせんと、きっちり測とるけどな。

定置網の種類

前は、季節ごとに魚の種類によって網を入れ替えとったが、今なら1年に1回、全部の魚に合う。昔のロープや網は綿やマニラ麻やったけど、今は化学繊維が多い。自分の設計に基づいて網を仕立てる。図面を書いて仕立て上げていくがや。

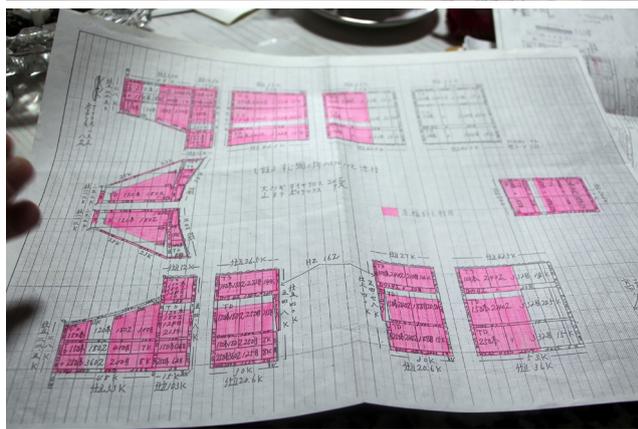
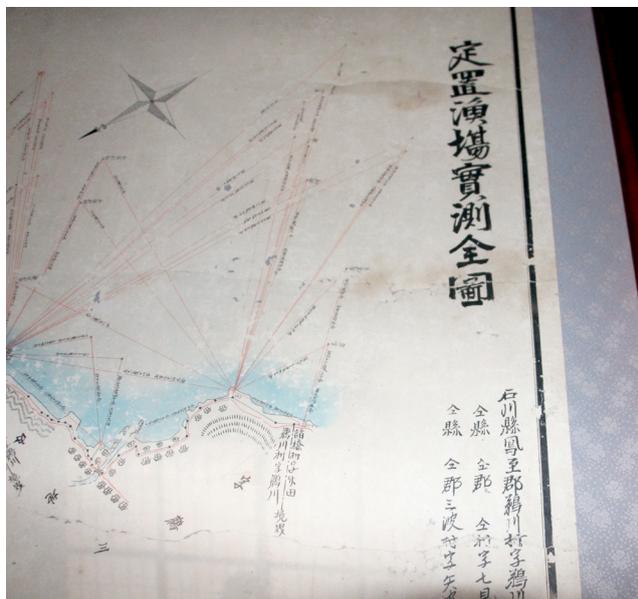
垣網をつたって魚は網に入って一番最後に金庫網にたどり着く。状況を見ながら揚げていくがや。たくさん捕れた時、いっぺんに揚げたら魚の値が安くなるし、傷むやろ。海の中やったら魚も生きとるしな。

イワシ網、タラ専門の網、一番大型が、大敷網！ 定置網は、ブリ・タラ・マグロ・サバ・イワシなど回遊してくる魚、なんもかんも捕るわけや。しまいには、クジラまでかかる。専門の網は、タラなら冬の寒くならな捕れんし、海の底にある。イワシは水面まで浮いてくるから魚や季節によって網の種類が違ってくる。

定置網には知事さんの許可がいるがや。むかし明治に定置網の測量があったそうや。そんな時の図面に七見と矢波のが書いてある。

新しい船

だいたい3億から4億、小さい船、大きい船もみんな入れてやぞ。今、日の出定置はもう1ヶ統おろすのに総額6億かかる。船もこしらえている。ユニック3台付けた大きい船(20t位)が1隻に、小さい船が2隻あればいい。網は深くなれば、なお広げにやならんし金にかかる。それに今ある番屋も傷んできてるから、新しがにしたいしな、これも入れて6億や、また、借金。



(上) 明治の定置網の測量図
(下) 新しい網の設計図

1日の仕事

毎日、休み無しや。毎日網を起すがや。それでも、潮の速い時や風がある時は、起こされんしなァ！ 魚の種類はいっぱいわからんけど、クジラからカタクチイワシまで何でもある。そんでも、それを捕ったら駄目やちゅうがやし。

朝の2時半に出航して5時に港に入ってくる。魚揚げて7時、船掃除して仕事が終わる1日やね。

気象と潮。暗いうちの仕事やから、前も後ろも真っ暗、船に乗っとる時は目が離せん。日中仕事するんとは違うよ。雨の日も仕事はある。倉庫行けばいっぱいあるけど、あんまりしてもね。若い衆を休ませんなんならんし、そうせんなァ、人も集まらんしね。

ブリ街道

うちは、宇出津の市場と氷見の市場。ブリなんか、能登のブリより氷見ブリの方が高値がつく。海水をマイナス3度ぐらいにし、シャーベット状にし、魚の鮮度を保たせる。鮮度

を保たせるには温度を下げ過ぎても駄目、マイナス3度がちょうどいい。氷見ブリになるには、ブリの色が大切なんや。ひと仕事、大事なんよ。

海水を凍らせるには時間も電気代もかかる。そうしなければ、高く売れんしね。

ブリ街道とは、名古屋までの高速を使って運ばれているが、あの街道沿いにノーベル賞の学者さんが多いやろ。ブリ食うとるさかい賢いんや。ブリ街道じゃなくてノーベル街道やったりしてなァ。

船の大きさと乗組員について

14tの大きさは17m、19tのものもある。おれは2隻もつとるし、大敷が7隻。魚捕るには大きな船1隻に小さい船が2隻はいる。船の位置を三角にして魚を捕る。3人はいる。家の網には3人若いもんがおる。船頭・船長・機関士がみんなそれぞれの仕事をしとる。

年は、30から40前の若いもんもおるよ。60代の連中もおる。学校出てすぐ来る20代のもんが日の出にはおる。機関士・無線士もいるからなァ。来年は、若いもんが3人は入っ



(左) 中田さん個人の船
(上) 製氷機
(下) 海水を取り入れ、製氷する
(左下) 日の出大敷の船



てくる。定年退職して漁師しとるもんもおるよ。いろいろやなあ。

環締方式とは

一度、網に入ったら金庫網に入って出られなくなる。婆ちゃんがもつとる巾着の袋あるやろ、あれと一緒にや。昔の網は、人が60人もいった。一度の網を降ろすのも上げるのにも苦労した。昭和25年ぐらいから、機械も手に入るようになり、エンジンつけて20tクラスの船使って、ロープの巻き取りも機械にさせる。でも、網の掛け方にも工夫がいる。能登町で船にユニックをつけたのは、俺や。トラックについてると同じや。たった3人で10t、20tの魚をとった。ここの船も真似してみんな船に機械つけた。工夫をした環締の網と船で会社組織になった。七見の漁師の多くは、底定置の網やったから、タラを捕る網がほとんどだった。

少し前までは、1月のタラは腹に子や白子がおるのが当たり前やったのに、最近では2月3月になっても腹に子（白子も真子）のおるタラがおらんのや。水温が違ってきたんかも。乱獲が原因か、産卵場所が違ってきたのが原因なのか……。でかいタラは、腹に子をもつとるタラなら目方が5、6kgあるが、子の無いタラは2kgぐらいしかない。今は、鶴川には底定置の網はもうない。

定置網と底定置網の違いは、底定置網ほど人間がいらん。15mほどの網の高さがあればいい。刺し網と一緒に。底の魚は、カレイ・タコ・アンコウなんか。海底から15mの位やなあ。定置網は底につかない。もちろん、魚が遊ぶところ（運動場）は、底につけるけど。ついてる所とついていないところがある。底定置網をしとる人はここらでは今はいない。だんだん、みんな大敷のような定置網にしとる。

海の魅力

朝早く起きて行くけど、こんないい商売はない。たいそうな時はたいそうやけど、一旦、網を降ろしてしまえば楽や。入れ替えとか管理とかしているだけや。防藻剤もあるし楽になった。これから網も改造したり一杯やることがある。人間を使わんと、楽しんで魚を捕る網をこしらえるかが問題やね。

雷が鳴ると鯨起こしていうて、低気圧が来るから、ちょうど、そのときにブリが捕れる時期となる。季節の寒暖。時期にあるもんや。天気が良くて、寒い日の、南西の風が吹くとブリが捕れる。もうすぐやわいね。

後継者について

大敷きの方は11人おるが、来年から18人にしようと思



日の出大敷の番屋

うとる。定置網の仕掛ける場所は衛星で測つとるし、知事さんの許可がある。主な仕事は、たるみが出てきた網を締めて張りに行く。全長 3000m ぐらいの網をね。深ければ深いほど浮いてくる網に鉛を織り込み重くする。その網に鉛を付けてさらに重さを付ける。これが日の出大敷の定置網や。

ちょっと前には、他の漁場の人でタイヤ（浮沈式ホース）にエア入れて浮かして付けて空気を抜き重りにする。エアが入っていたら浮いてくるからね。この方法は安上がりだからタイヤを使って定置網をしとった人もおるけどね！

日の出の定置は、定置網の設計図を作りそれをもとにみんな仕事しとる。

今後の取組み

新しい網や船で、楽しんで魚捕る。そのために機械化して、海の仕事したい若い衆が頑張るって魚を捕り、漁の楽しみや醍醐味を味わってくれることで、この能登町の定置網漁の漁師を繋いでいくことかなあ。

[取材日：2014年8月8日・12月2日、写真12月14日]

PROFILE

中田 作助 なかだ さくすけ

昭和7年4月2日生・82歳
漁業、有限会社「日の出大敷」役員

能登高校の前身石川県立宇出津水産高校を卒業後、家業の漁業を継ぐ。環締方式・船にユニックを取り付けた網あげ・ロープの巻き取りの機械化・製網会社との共同研究による網の研究等先見の明を持った漁師であり、経営者である。様々な手法を凝らした定置網漁を取り入れ、2人で漁ができる効率化を図った。



● 取材を終えての感想 ●

初めて「聞き書き」を体験してとても勉強になりました。中田さんに定置網についてインタビューして、魚の習性に合わせた網の仕組みにとっても感心しました。

中田さんの話を聞いて一番印象に残っているのが網の大きさや船の値段など、漁業に関する単位が桁ちがいに大きかったことです。

私の兄は、日の出大敷の漁師をしています。いつも「番屋で食べる魚やご飯がおいしい！」と言っています。漁業のことを知る機会になり、とてもよかったですと思います。(宮藤莉奈 写真：左)

私は、この研修を通していろいろなことを学ぶことができたと思います。インタビューの準備として、質問を考えるのですが、なかなか思いつかなかったり、インタビュー中に何度かつまってしまう場面がありました。でも、そんな時、中田さんは船の模型や図等を使って丁寧に教えて下さいました。

書き起こしは、その地域の方言があったり、漁業の専門用語がたくさんありとても大変でした。でも、定置網漁を繋いでいこうとする中田さんを取材していく中で、こんなに頑張っている人がいるんだと感動しました。私たちの原稿を読んで少しでも多くの人に中田さんの思いが伝われば良いなと思いました。(東山瑠花 写真：右)

私は、この聞き書き経験で、本格的なインタビューをする時にすごく緊張していました。インタビューをしている中で、漁業の専門用語が使われると理解できなくてとても大変でした。

でも、その中でどういう意味なのかを聞くと、中田さんはちゃんと説明して下さいました。実際に使っている設計図や、船の模型を使って説明して下さり、少しずつ理解が深まってきました。インタビューは、次から次へと疑問を解決しながら進むものだと感じました。漁業についての事前

学習の必要性も感じました。

本校は、石川県で唯一の水産コースがある学校のため、原稿を仕上げるまで専門の先生がいろいろ教えてくださいました。この環境があって、私たちの原稿をまとめることができたことに感謝しています。

(山下明星 写真：中央左)